

宮澤賢治
生誕120周年

銀河鉄道の夜空へ
Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

巻

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会

写真：飯島裕



水沢VLBI観測所図書室に収蔵されている「星座早見」（日本天文学會編 三省堂発行 第卅六版 ※初版は明治四十年発行）



❶ 冬本番を迎えようとしていた12月最初の日、会議のために岩手県奥州市水沢地区にある、水沢VLBI観測所を訪れていた。会議が延びてしまったこともあって、予定した新幹線には間に合わず、一本遅らせて帰ることになった。

さて、どうするか、と窓外をみると、木立が冬支度をしている姿が寒々しく、裸になった枝が一瞬の強い風に揺れた。おお、又三郎がやってきたな、など思う。そういえば風の又三郎の初期の原稿には緯度観測所の木村榮先生が打ったテニスボールにいたずらをする様子が描かれていたはずだ。そう思うと、妙に木村記念館に立ち寄りたくなった。

身支度を調べて本館から出て、木村記念館に向かった。不思議なことに記念館の玄関は空いていた。中に入って、展示物を見ながら奥へ進む。時代を感じさせる雰囲気はゆっくりと静かに自分自身を包み込むのがわかる。そして奥の木村先生が仕事をしていた所長室に入った。と、その机の上には一つの星座早見盤がおかれていた。日本天文学會が編集し、三省堂が明治時代に出した古い星座早見である。星座盤は黒の背景に、白抜きで星や星座線、そして天の川が描かれている。「星座早見」の文字も右から左だ。

それにしても、と近づいていく。この星座早見、大事なものとして図書室に収蔵されていたはずでは？ そう思い出すと同時に、体が宙に浮くような妙な感覚に襲われた。あっ、と思って床を眺めて何事もないことを確かめてから、顔を上げると、そこにはそれまでいなかったはずの二人が会話をしているのに驚いた。しかも、当の星座早見盤を手にはしているのは、写真でも見たことのある木村榮先生そのものだった。

「賢治さん、1910年のハレー彗星は、このあたりに位置していたね。夕方、西の空に沈んでいくのが見えたんですよ」そう語る相手は、これまた若き日の賢治であった。

「そうでしたね。学生時代の友人が甲斐の国に居るときに目撃したスケッチを見せてもらったことがあります。南アルプスの山並みの上に長大な尾をたなびかせた姿でした」

「ほう」
「しかも彼はスケッチに、そのときの印象を描き残していました。いわく『銀漢ヲ行ク彗星ハ、夜行列車ノ様ニテ 遙カ虚空ニ消エニケリ』と」

「よく覚えていますね」
賢治は少しうつむき、寂しそうに言った。
「ええ、彼とは親友でしたから」

いったい、俺は何を見ているのだ。これは夢なのか。幻なのか。あるいはとても精巧なホログラムのような出し物なのか。心臓が高鳴って、まるで動けない。彼らの会話は、そのまま進む。私が見えていないようだった。それでも、必死に手を伸ばしてみた。



● その手が二人の幻影に届くか届かないかの時のことだった。再び体が何かに包まれるような妙な感覚に襲われた。と、同時に見ている部屋の形もぐにゃっと曲がり、賢治さんも木村先生の姿もまるでムンクの叫びのごとく、細長くなっていった。おお、これがブラックホールに吸い込まれるときの「スパゲッティ」現象か、と思った瞬間、その姿は霧のように消えていき、ふたたび足下がしっかりする感覚が戻ると、先ほど木村先生が持っていた星座早見盤を手に入れているのに気づいた。

…あの体験は本当に幻影だったのか。もしかすると、机の上の星座早見盤に気づいて、近づき手にする動作だけが現実だったのか。そんな風に思いながら、星座早見盤をしげしげと見つめてみた。と、セットされた日時は今夜、つまり12月1日20時だった。そういえば、すでに外は暗い。星座早見を手にしたまま、外へ出て、夜空を眺めてみた。

そこには東京では見られないような星空が広がっていた。水沢では、まだこれだけ星が見えるのか。そう思いながら、西側を眺めると夏の星座たちが沈みつつあった。低いところには、わし座の一等星アルタイル。北側にはこと座の一等星ベガが仲良く沈もうとしていた。その上、高度で言えば30度から40度ほどのところだろうか。はくちょう座が地平線に向かって落ちる姿を見せていた。天の川の中に屹立する「北十字」の姿だ。星座早見を見直してみると、まさにそれらの星たちが再現されていた。

と、遠くからかすかに音が聞こえてきた。それは次第に大きくなっていった。ガタゴトガタゴトという音ははっきりと聞こえるようになると、同時にしばしばシューという、甲高い擦れたような音が混じっている。それは子どもの頃、故郷で聞き慣れた音だった。間違いなく蒸気機関車の音である。

(そんなはずはない)

そう思った。蒸気機関車が現役を引退して、すでに半世紀近い。観光用に走らせて居る地域はあるが、このような時間に東北本線を走るはずはない。また幻想なのか、それとも何かの間違いか。そう思いながら、はくちょう座を眺めていると、そこから天頂へ伸びている天の川が妙に輝いている気がした。

(秋の天の川って、こんなに濃かったかな?)

しばらく、星空をじっくり眺めていない自分にとって、それは実際の星空を忘れていただけだったのかもしれない。そんな風に思いながら、天高く秋の星座へ流れ昇っていく天の川を目でたどるうちに、蒸気機関車の音はなんだか東北本線を外れて、こちらに向かってきているのではないかと、思うほど大きくなっていったのである。

★「式」は2017年春の号に掲載の予定です。

